

研修成果報告書～岩手県大船渡市～

東北ライブハウス大作戦。津波がライブハウスを奪った地域にもう一度ライブハウスを建てようという大作戦。具体的には PA と呼ばれるライブにおけるいわゆる裏方の会社の人間が発起人となり始まったこの大作戦は、直接の寄付受付はもちろん趣旨に賛同するアーティストのライブ会場や音楽フェス会場にブースを構え、グッズ販売などでも寄付金や活動資金を集めている。そのためロックファンにはかなりの知名度をほこっているのだ。私も当然存在は知っていて、この研修制度を利用し何かの力になりたいと思った次第である。

今回の研修は三つのステップを踏んだ。事前、当日、事後とそれぞれ行うことを決めていたわけだが、事前段階で行ったのは研修先のライブハウスである「東北ライブハウス大作戦

大船渡支部 LIVEHOUSE FREAKS」へのアポイントメントを取ることに、取材内容のリストアップ、そして直接手渡しする寄付金集めだった。地元調布を駆け回り寄付金を集めたのだが、音楽にさして興味がない友人は誰一人としてその存在を知らない。そんなものなのだろうか。しかし集金と PR を終え、夜行バスに乗り込みいよいよ研修が始まった。

旅としてはほぼ全くのノープランなので、取材は大船渡に到着してすぐの時間に取り付けた。マップの表示されたスマホ片手にどんなライブハウスかと思って辿り着いてみると復興商店街の一角にひっそりとたたずむプレハブ小屋だった。場所間違えでないかと恐る恐るドアを開けるとそこにはいかにもバンドマンの二人が。FREAKS 店長の菊池智仁さんとスタッフの菅野安宣さんだ。まずは寄付金を手で渡す。



ちなみにこの寄付金は備品整理代にまわされるそう。よろしく頼みます。

そもそも東北ライブハウス大作戦は一見復興支援プロジェクトと思えがちだが、それだけではない。これは一言で表すならば音楽好きの人を繋げるプロジェクトなのだ。その共通項がたまたま「フッコウ」「シンサイ」であっただけで人と人が繋がる過程はこの大作戦も学校の友達作りも何も変わらないものだった。そしてこの人と人の繋がりというものが何より彼ら二人が大切にしていることで、複数バンドでのブッキング、いわゆる対バンを積極的にブッキングする、高校生バンドは 22 時に帰す、他の商店街の店で積極的に買い出しをするといったものだ。そもそもこの二人に白羽の矢がたったのも the band apart というバンドからのコネクションによるものなのだ。そんな人としての部分を大切にしている彼らだからこそ葛藤もあり、大船渡にライブハウスができたのは 2012 年 8 月 18 日にオープンしたのだが、当時はまだまだ今ほど復興も進んでいなく、「店より先にライブハウスが建っているものか」と悩んだそうだ。またライブ開催日に大きな地震が起こったときはライブ開催を巡って「ケンカ」をしたほど真剣に向き合っているのだ。(ちなみに彼らはそれぞれ別に本業を持っている。)震災なんて当然起こらなければ良かったのだが、自然災害という共通の敵が現れたことでこのような素晴らしい運動が生まれたこともまた事実だ。

これからの大作戦についても話を聞いてみた。現在大船渡、宮古、石巻にライブハウスが出来ているわけだが、4 軒目をたてるプランは現在無い。なぜなら維持費に少なくない金額を費やさなくてはならないからだ。

今のままの形式で内容を昇華させていくのが大作戦全体の当面の活動予定だ。大船渡のこれからについてだが、まずそもそも今回お邪魔したライブハウスは厳密には FREAKS ではない。元々かさ上げ工事の対象区にしかライブハウスを建てられなかったのが(ライブハウスを建てられる、すなわち騒音を出せる場所というのは周りに人の住んでいないところになるのだが、皮肉なことに街から近い海沿いのエリアは今は何もない)津波に耐えた建物をライブハウスにしたのだ。



しかし約二年のかさ上げ工事中の期間中は移転しなければならぬので復興商店街で店をたたむ青果店のプレハブを譲り受けたという経緯だ。当然商店街でレッツ爆音ロックンロールというわけにもいかないのでもともと **FREAKS** に入っていたバーガーショップの営業とアコースティックライブくらいなら、、、というスタイルでやっていき、かさ上げ工事終了後にまた写真の建物に戻るのだ。そのためには当然人間と金が必要。継続的な支援が必要なのはどこも同じなのだ。

ここまではライブハウス大作戦スタッフとしてのお話。ここからは被災者としての話を伺った。一枚目の写真の左の菊池さんは内陸で農業を営んでいるので被災はしていない。現に「俺は被災者じゃない」と自分で言っていた。しかしそれでも岩手県民というだけで間接的なダメージは大きく受けた。そんな中収穫物や自宅のコンバイン用のガソリンを困っている人に分けてあげたそうだ。菊池さんに敬意を抱く一方で、数字を交えて具体的に身を切った話をされると支援が当たり前になりつつあった当時の風潮に違和感を覚えた。右の菅野さんは陸前高田在住で家を流された。菅野さんは自分もバンド活動をしていてメンバー全員の楽器を自宅の地下スタジオに保管していたので、バンドマンとしても全財産を失った。しかし大作戦繋がりですぐ人気バンド **10-FEET** のお古の楽器一式を譲り受けたのだ。「結果的にはよりレベルが高い楽器が持てたよ」と笑っていた。震災が被災者から奪ったものは数知れないが、悪いことばかりではないとここでも思った。

震災の話は尽きない。ここからは一問一答形式で記述する。

Q. 現地の人間から見て復興のスピードは早いのか、遅いのか。

A. 早すぎる。特に大船渡は。建築中の建物の隣で取り壊しが進んでいるようなちぐはぐな状況を街の至る所で見ることが出来る。もっと復興プランを共有すべき。

Q. 東京の大学生にできること、すべきことは

A. 学生が金を送るのも正直額は知れてるし、体で支援するにしてもその道のプロがいる。今君たちにできるのは本当の意味で震災を忘れないこと。忘れていないというかもしれないがだったらどれだけ地震への対策をしているのか。家具を見てみろ、救急箱を見てみろ。だからそれだけに三年半経ったこのタイミングで東京から学生が来てくれるのはとてもうれしかった。(俺もうれしかったっすよ)

Q. これからの東北はどうなっていくべきか

A. 自分は被災者なんだという自覚を持ち、どの段階なのか、何が必要なかを考える。復興が完遂する、被災者が自立するのはまだまだ先だが、被災者の考えの自立はそろそろなされてもいい頃だ。

Q. カウンセラーを目指しているのだが、そういった立場の人間に求めることは

A. まず人として信頼を得る。肩書きが活きるのはそのあと

他にも人間としての生き方や人生観、かっこいいとは何か、くだらない話までさまざまな会話を交わした。研修としても旅としても記憶に深く刻まれた三時間だった。

こうしてまとめてみると兎に角よく出てくる表現が「人として」。津波は東北にだけ現れたが、このテーマは世界中の人間に内在する。東京には不自然な更地はほとんど無いし、航空写真からわかるほどのベルトコンベア式土輸送機もない。しかしこのテーマは変わ

研修成果報告書～岩手県大船渡市～

らず抱えているし、大きな出来事が無い分リアルに私たちの目の前には未だはっきりとは姿を見せない。この旅で見つけたこのことを、一生追いつけていこうと思う。